
異界から召還された真水の騎士

漆黒の光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界から召還された真水の騎士

【Zコード】

Z9124F

【作者名】

漆黒の光

【あらすじ】

大学受験に失敗し、翌日はずつと慕ってきた女子に振られ、更にその翌日には気晴らしに行つた山の崖から転落した斎賀。このまま死ぬかと思ったが落下中に見知らぬ場所に飛ばされ、唯一の武器はいつの間にかもつっていたチェーンソー。斎賀はこの見知らぬ土地で生き残ることは出来るのか…………。王道的なファンタジー世界に召還された一人の少年が、新たなる風を巻き起こす！

第零話 襲撃される者

ジャスカイド帝国南部上空。

広大な土地を有するこの大陸で、命を賭けた追いかけっこが開催されていた。

「待てええええ！」

「おい、逃がすなよ！」

「追え！ 追ええ！」

どこまでも純白で彩られた無数の羽が集いし翼が、風を切りながら自らの主を前へ前へと押し出し加速する。

傍から見れば気持ちよさそうに滑空しているが、実際その顔に映える表情は少しながら重く、とてもじゃないが機嫌が良いようには窺えない。

その身に纏っている私服も、丁寧に織られた高級品だけに僅かに切り裂かれた痕が目立つ。

病弱なまでに青白い肌が裂け目からちらちらと垣間見られるが、高度が高度なだけに地を這っている人間には雲を通してその姿を覗う事は叶わなかつた。

腰までありそうなほど長くそれでいて艶やかな白髪も、本来ならば重力に従い垂れる筈だが、今は移動中の為地面と平行状態で優しく主人に寄り添つてゐる。

天空を滑るように駆け巡る少女の姿は、翼の色も重なつて、御伽噺に出てくる天使のようだつた。

後れ馳せながらも後ろからは飛行魔法を駆使し追尾してくる者の怒声が高々と響いてくる。

四人の追跡者は、何れも頑丈で分厚い甲冑に身を包ませ、弓をその手中に握り、少量でも少し肌に触れたならば一分も立たずに絶命する呪術をあらかじめ施していた矢を数本ずつ入れた矢筒をその背に背負い、女性に迫つていく。機動力で言えば魔法を駆使している追跡者に少し分があるが、女性は身軽な服装、対して追跡者は相当な重量を抱えて飛んでいるので五分五分といったところだろうか。

追つている者と逃げている者。双方は双方とも互いの存在に恐怖し、一方はその存在を消そうと蛮勇を奮い立たせ、もう一方はその存在から自分という存在を奪われないように体を竦ませながらも皮肉なことに敵という存在が彼女の気力を取り戻させ何とか逃げ延びている。

「ハア……ハア……ハア……」

断続的に翼を動かし続けるという行為は大地を全力疾走で駆け抜けるという行為と同等あるいはそれ以上の体力を要する。今は滑空だけで済ませてはいるがそれでも疲労の色は隠しきれない。

「逃げるてるだけの奴なんて怖くねえ！」

追跡者の一人が己の精神を安定させる為に口に出した言葉だった。自らを恐怖から護る為の行いであり自己暗示でもある。

しかしその言葉がこの嫌な雰囲気とおさらば出来る機だと考えた追跡者のリーダー的存在は

「そうだ！ 逃げるてるって事は俺らより弱いって事だ！ ならあんな奴に恐れることはねえ！ 何が帝国創立以来最高の魔法使いだ！」

— ८८ —

一々噛み碎いて自分たちがいかに優勢であるかを語り、味方の恐怖を瞬く間に打ち消しそうとした。それに答えるように仲間たちからの雄叫びがあがつた時、それは完全なる成功を意味し味方の士気が爆発的に上昇する。

「……………」

背後から感じる威圧感が増したことと自分自身の体力が最早限界に達した所で女は決心したように翼を折りたたみその身を空中に投げ出す。実体の無い雲を貫通して下へ下へと重力に従つて急速に落下。頬を伝つて零れ落ちた多数の汗が、空に舞い太陽に照らされて煌く。

そう追跡者の一人が歓喜の表情で声を張り上げる
が

「馬鹿野郎！ あいつが向かつてるのは

それを言い終わる前にもう他の全員は敵がどこに向かっているのかを完全に理解している。ならず者の集団だからこそ少し抜けた所があるが、これでも一応プロフェッショナルの傭兵。近隣一帯の土地勘は誰もが持っているのだ。それが例え厚い雲が下を覆い尽くしていたとしても大体の場所は分かるのだ。だから彼女の落ちた先は

「傾国の森に入らせる前に殺せえええ！」

「おおおおおおお！」

傾国の森。それは悪夢のような存在だった。

元々は精霊の森という正式で由緒正しい名前があつたのだが今その名である森を呼ぶものはそうはないだろう。

追跡者たちが所属している国ジャスカイド帝国と、この世界で唯一戦争禁止令を敷いているデスジニア共和国の国境線に位置するこの森は、超巨大規模といつても過言ではないほどの森だ。具体的に言えば世界全体の約三分の一の樹木を占めているという。帝国としてはこの森を整備し、一度デスジニアへと戦を仕掛けようと試みたのだが、無限に沸いてくる魔物に劣勢を強いられ、躍起になつた先代帝王が無理矢理森を制圧しようと十万という大規模な遠征を行つたのだがそれでも屈強な魔物たちに追い返されたという。その際に歴戦の兵士が次々とその命を奪われた為に帝国は一時大混乱に陥つたらしい。

その事件があつてからは国を傾かせることの出来る強大な森という経路で【傾国の森】という大層な名前が付けられたのだ。

当然その森に人が迷い込みでもしたら九割九分九厘命を落とすといわれているが

「相手は魔物の同類だ！ なんとしてでもここに仕留めるぞ！ 遠慮無しに打ち込め！」

その掛け声で急降下しながら矢をつがえる。先端の鉄のやじりが特有の光沢を放ち

「 つてえええ！」

十分に引き絞られた弦がその手中から解き放たれその反動で鋭い音を立てながら多数の矢が敵めがけて飛んでいく。

「ちっ」

直線的に飛んだ矢は標的に狙いたがわざ直撃する軌道で放たれたのだが、森に落ちて木に防がれたのが先か仕留めたのが先なのかは人間の視力では判断できない。

仕留めた可能性のほうが高いのだがそれでも万が一ということがある。世の中は完璧といわれることが皆無であり、故に甘くないのだ。だがそれで仲間が死んでしまつたら本末転倒。奴の魔法をまともに喰らえば気絶あるいは負傷するだらう。そうなつたら魔物に食い殺されるのが落ち。

どうするか……どうするか……

「隊長、どうするんですかい？」

判断する時間すら「えられない。その上で隊長と呼ばれたものが行う決断は帝国を左右する決断もあるのだ。もし奴が生き残つていれば同類を引き連れて帝国を滅ぼしに来るかもしれない

冗談でも笑えないような可能性に隊長は

「追う。少しぐらいなら大丈夫だ。奴が死んでりやそれを確認して報告すればいいし死んでなくてもそこら一帯を調べつくせばいい。所詮翼がなけりや何も出来ない奴だ、小娘の足程度じや俺らから逃げ切ることは不可能だらう。つてことで行くぞおおおおおー！」

「おおおおおおお」

隊長に鼓舞された他の仲間達は自身の発動している魔法を解除し新たな魔法を練る

欲するは【風】 我が身を守護する風となりて衝撃を緩和せよ

省略された呪文を詠唱し終えるとそのまま地面に落下していき何の抵抗も見せずに地面に足から着地した。本来ならば骨が粉々に砕けてもおかしくないというのに風の加護を受けた追跡者達は全くの無傷。そしてそのまま何事も無かつたかのように四方に分かれて敵の探索を開始する。

「さて……狩りの始まりだ」

隊長は口の端を吊り上げて猛禽類の如く笑った

「なんで……ハア……こんな……ハア……」

少女 フアリシア・ダンダルゲルグは太い木に腰を預け肩で息を

しながらも必死で疑問を虚空にぶつける。

だがやはり答えてくれるものはそこにはいない。もとより孤独な自分が誰かに問うというのも少し可笑しな話かもしれないが。

「帝国が……裏切った……？」

ファリスは人間ではない種族でありながら帝国に属していた。きっかけが何だったのかは忘れた。

主に後方支援部隊として絶大な力を戦場で遺憾なく發揮し、その功績が認められ「天使」とまで呼ばれるようになつた。自分と全く正反対に属する憧れの存在に……

「やつぱり……人間じゃないと……駄目?」

そして何かは知らないがジュショウシキなるものが行われて自分がその主役だと文書で送られてきたので行ってみれば、扉を開けた途端襲撃に合い何とか間一髪で逃げてきたというわけだ。

確かに戦場では恐怖の目で見られていたが……それでもあの仕打ちは無いだろうとファリシアは落胆していた。

「それよりも逃げなくちゃ」

呼吸がある程度整ってきた所で四肢に力を込めて立ち上がり、周囲に警戒を張り巡らせる。

希望的にはこれで引いてくれると助かるのだが、十中八九追いかけてこの森に入つてきているだろう。

先程の矢がかすりもしなかつたのは運良く樹木が庇つてくれたからだ。もう一度とそんな幸運は訪れまい。

「魔法が使えればなあ……」

ファリシアは結論から言つて今魔法が使えなかつた。

何故なら戦の時に魔力を酷使しすぎたからである。次再び使えることになるのは一週間先ぐらいだろう。

「逃げなくちゃ」

再度それを口にしてファリシアは力強く大地を踏みしめた。一步また一步と少しづつだかそれでもしつかりと前へ進む為に足を動かす。駆け出さないのは足音で追跡者に居場所を教えることにならかねないからだつた。

「あれ？」

歩いている最中に何かしらの違和感を感じる。何に感じているのかまでは分からぬがそれでも何かか变だつた。その違和感に首を傾げながらも、今はそんなことに構つていられる場合じやない、と思ひただひたすら歩く。

それからどれくらい歩き続けただろうか。疲労がピークに達したので適当な木陰を選んでそこに座り込んだ。

颯爽と森の中を吹き抜ける風が、熱くなつた体を冷やしてくれても気持ちが良い。

「つー あれはー」

異常なまでに高い視力と気配がつこに向かつてきている敵の存在を教えてくれ、体をびくりと震わせた。だが幸いにも未だこちらは敵に気づかれてはいない。ならやつよう

はいくらもある。

気配を極限まで消して気つかれないうちに立ち上がった瞬間

「え？ わやつ！？」

すとんと尻から地面へと落した。多少の痛みはあったが、問題はそ
っちではない。

「足が……」

今まで酷使してきた分、足が体の全体重を支えきれなくなつてきて
いるのだ。
さつき一度緊張を解いたので最早立ち上がる術は無い。

「なら茂みに」

その後の言葉は紡げずにファリシアは絶句した。今更ながらさつき
感じた違和感の正体に気づいたのだ。

そう。この森には本来あるべき筈の雑草が見事に刈り取られていた
のだ。

確かにそれでも小さい雑草などは生えているが、とても身を隠せや
うな代物じゃない。

打つ手は全て塞がれ、キングはただチエックメイトを宣告された状
態。

「見つかっちゃった」

あわよくばこのまま見つからずに通り過ぎるとを期待していたの
だがそれも叶わず、後は狩られるのを待つだけになった。

ファリシアには武器も『えられていないのに対して、敵は武器と魔

法を十分に使用してくる。いや、例えファリシアが武器を持つていたとしてもこの状態だつたらどの道狩られるだらう。

「魔法が使えればなあ」

今日は同じ台詞を何度も言つてしまつ。それだけもつ頭に余裕が無いんだろうなとファリシア半ば諦めた気持ちで思つ。敵は泥を跳ね上げながら驚くべき速さで地面を駆けて向かつてくる。魔法でも使つているのだろうか。

その間、みるみるひにファリシアと敵の距離は縮まつてしまふ。そして

「はあああああー」

雄叫びと共に敵の掲げていた武器は振り下ろされる。

次の瞬間…………悲鳴と共に辺りが血で鮮紅に染まつた。

第零話 襲撃される者（後書き）

初めまして、漆黒の光といいます。
小説を書くのは余り得意ではないのですが、面白く読んでください
と幸いです。

第一話 行徳う者（前書き）

ここからが主人公（斎賀）視点となります

第一話 行徳う者

平成二十一年春。

この年は斎藤斎賀さいとうさいがにとって人生最悪の年と化した。

実力的に言えば合格間違いなしと思われていた大学合格でまさかの不合格。

翌日には高校時代ずっと好きだった彼女に思い切って告白してみたら呆気なく失敗。

そのダブルショックを癒す為に友達と一緒に山へと行つたら足を滑らせて転落。

二度あることは三度ある　またにこの言葉が身に染みたのであった。

宝くじも一万円が当選したこともあつたし十分に運はあつたのだが……使い切つてしまつたのかもしれない

しかしそんな俺でもほんの少しほ運が残つていた。

落下中に体が浮き上がり視界が歪み手足がばらばらになるほどの痛みが斎賀を襲つたかと思えばどこか知らない場所で寝ていたのである。

「…………」

斎賀は一人呟いた。しかしその声は虚空に吸い込まれるように消えていく。

誰か答えてくれないかなーと考えて口に出してみたのだがどこかか

ら返事が返ってくる気配全くといつていいほど無い。
まあそれもそのはずといつか……。

斎賀は悲しくなって周りを見回す。

「……」

そして無言。

周りには人らしきものは見当たらない、それどころか街のようなものさえも視界に入らない。

前後左右を見渡しても見えるのは木か草か花だけ。上空は青々とした大空が広がってはいるがそんな物を見たところで何の足しにもならない

急展開に頭が付いていかず、怪奇現象にも興奮できない。いつもならば騒いで氣を紛らわせるのに……

「……」

更に無言。

ずつしりとした質量がかかつている腕に視線を落とした。

何も無いはずの手中にはどんな奇跡が起こったか、チエーンソーが握られている。

それは鎧が無いどころか刃こぼれも無く新品同様。

使い方なんてものは一度も使う機会が無かつたので知らないが使う機会も無いと思つしまあいいだろ。

……

何で俺、こんな所にいるんだろう？ 何で俺、こんなもの持つてるんだろう？

疑念が次々と心中で渦巻いたが、それに答えてくれる者もいないし、

自分で考えることも不可能。

余りの心細さに、俺は頭を抱えたくなる。

「……」

再度無言。

俺はチヨーンソーを湿つてある地面へと置き、いつの間にか背負っていたものを自分の皿の前に出す

「……」

全く見たことの無いようなデザインの鞄だった。

そもそも日本語じゃなくて外国語で書いてある。英語でもないようなので解読するのはすぐに諦めた。

背負っていたということを免罪符にして中を覗いてみるとそこには食料と水分らしきものが入っていた。

斎賀は訝しげに鞄の中身を一つ一つ外に出していく。

「……は？」

どんどん出していくのだがきりがない。この鞄にどうやつたらそれここまで入るのかとこうぐらじ出てくるのにまだ中身が尽きることはない。

膨大な量も問題だったが一番不審に思つた点は入つていた中身の種類だ。

これから先飲食には困らないほどある携帯食料と飲料水・チヨーンソーと同じく新品同様のサバイバルナイフ・問題なく使用可能な懐中電灯と電池・取つてはプラスチックだけど先つちょの方は石でできた用途不明の何か・ドレッシングみたいな容器に入つた何か・簡易式のテント・布団・サイズがピッタリな服等、本当に様々な物資

が山のようになっていて斎賀が真っ先に感じたことは

「サバイバルでもしろってか？」

そうボソッと呟いた。

鞄がどういう仕組みでこういう風になつてゐるかなんて知つたこつち
やない。現に漫画やアニメなどでは普通に存在してたから誰かが作
つたかも知れないからだ。

正常に働いていない頭はやっぱり萎えていた。

「何で俺がこんな所にいるかも分からんしかどうあえず生きていると
いうこと事態は確かだ。

のがありありと分かつた。

「確かにこれだけあれば何でも出来るが……」

そういうて物資の山を見る。それは十分すぎるほどの資源だつた。だけど物資があつても足りないものが一つだけある。『人』だ。人は人がいなければ存在できず支えあうこと出来ない。当然斎賀もその中の一人で一人は虚しかつた。

家族がない。親友がない。知り合いもない。人さえいない。何の状況説明もなしにこんな場所に放り込まれて何をするわけでもなくただ生きろという。

最初のうちは頭が混乱して状況が把握できなかつたのだがたつた一人で外国の地に立たされて味方はいないと思うと寂寥感が胸にこみ上げてくる。

う。

誰に知られず誰にも見取られること無くただ無残に死ぬのだろう。
巫山戯るな！ 突然そこで憤怒の念がふつふつと沸きあがつてきた。

死ぬ？ 果てる？ ああ巫山戯るなよ！
何で俺がそんなことを思わないといけない！？

「……巫山戯るな……」

広大な森林の中で斎賀は小声でゆづくりと呟く。
深い余韻を残し、呟きが響く。

「こんなわけの分からん土地で死んでたまるか……」

死んだ魚のような目をしていた先に対し、徐々に瞳に決意が伴い
そのハイライトが復活してきている。

「死んで……たまるか
つ！」

斎賀は呟えた。

こんな所で死にたくない……死ない！

声高に身の内の決意を絶叫して体に喝を入れる。両の手は拳を握り

その決意を忘れないことを誓つた。

急いでかい声を出した為に小鳥がばさばさと空へと羽ばたいて行つ
たがそんなものは関係ない。

「……けほつ……かはつ……」

喉が枯れて慌てて500mm程度の水を飲み干しそれによつてむせ

たりしたのだが……。

……何馬鹿やらかしてるんだろ俺。

その後テントを四苦八苦しながら建ててその中に布団を敷き、しつ
かりと熟睡できたのは斎賀が大物だからなのかそれとも鈍感なだけ
なのか……。

上機嫌に歌つような小鳥のさえずりが田舎まし代わりとなり斎賀は起動した。

ふあ～……眠い……後30分位寝よかな。

「知らない天井だ」

朝開口一番に発したのはやはりお約束である。
ここで通じるかどうかは怪しい所だが……。

朝は低血圧な為に起きるのは苦手なのだが場所が場所なだけにそんなことを言つている暇は無い。

とりあえず布団を適当に剥いでテントから抜け出し太陽の光を浴びて背伸びをした。

「
ん」

声にならないほど気持ちの良い朝の背伸びは天然の森林の中だからこそ余計に気持ちよかつた。

ついで深呼吸をすると樹木によつて清められてひんやりした空気が肺に入りその味を初めて感じられる。

「一週間程度だつたら悪くないかも……」

昨日あんなに凹んでいたのに凄い立ち上がりよひやはり流されやすい性格の為だつ。なにはともあれポジティブシンキングである。ものは考へよつて變わるのだ。

「殺風景な場所だな」

木。木。木。

やはり木しかない。それが普通かもしれないが、やはり楽しめないのは嫌だ。

例えは狐とか狸とかがいればそれを鑑賞したりして暇を程よく潰せるのだが、そんなに簡単に見つかるものでもないし。逆に熊が出てくれば必死こいて逃げ回らなくちゃならんし。下手すりや食われて死んじゃうし。

「どうしたもんかな」

人生とはやはりまま成らないものである。

「暇じゃないけど暇なんだよな～」

せめて夢落ちであればといふ夢に希望もむづき無残に砕けたので、帰る方法をどうにかして探さなければならない。
しかもしもここから適当に歩いて獰猛な野獸の領地リコトリーに入つてしまつたらそれこそただの間抜けだ。

だからといって探さなければここで朽ち果てるしかない。

結局は安全策をとつてここで暮らし続けるか、危険を冒してこの森を抜けるかの一択になるわけだ。

街まで行けば交番とかに行つて適当に手続きすれば帰れるもしくは保護されるわけだし。

「とつあえず動くか

下手な考え方休むに似たりである。

斎賀はテントを元の形へと戻しどうやつて入ったのかは不明だったが、鞄へと収納した。

「さていっちょ行きますか！」

元気の良い掛け声に合わせるように体が軽く動かせる。

斎賀の記念すべき？一田の朝であった。

一時間後

「たああああすうううけえええてええええ！」

斎賀は後ろから迫り来る獰猛な野獸と追いかけっこをしていた。出会いはほんの些細なことで尻尾を踏んでしまうとこうべタなことをやってしまいまさに今その命を狙われているのだ。後ろから物凄い足音を響かせ、ちよこまかと動き回る斎賀を追いかけていっているのは

『アオ ン！』

黒い毛並みをした狼だった。

斎賀と同じくらい大きな体躯で、牙やら爪やらが鋭い狼。すぐに捕まるかと思ったのだが、何故か狼と同等の速さで大地を駆け抜けながら必死に敵の攻撃をかわしている。

「謝るから追いかけるな ！」

などと狼に語りかけているが、それも虚しく失敗に終わる。その後も当たつて砕けるの精神で試行錯誤してみたが、全てあえなく失敗した。なので出来ることは走る、足を動かす、大地を蹴るのどれかしかない。まあどれも似たようなものだが……。漆黒の長髪がぐしゃぐしゃになり、数本べつとりとした汗で顔にひつつく。

「俺なら空を飛べる！」

何を思ったのかは知らないが斎賀は急に立ち止まり瞳を瞑つた様だ。
そして

「

「

斎賀は呪文を唱えた。

しかしその呪文は完全に出鱈目でたらめだつた為発動しなかった。

狼の攻撃

「ギヤ

！」

斎賀の服を切り裂いた。斎賀の精神に100のダメージ、斎賀はパニックに陥った。

服に少し風穴が開いたことに対し斎賀の恐怖心はますます強くなり、テンパリながら狼に向かつて怒鳴った

「死ぬ！ 絶対死ぬ！ 本当攻撃とかすんじゃねえよ！ 僕の命尊重しろよ！ 僕は逃げるからお前もう追つてくるなよ！？ いくぞ！？ 一・二・さ ぎや ！」 言い終える前に攻撃するなつて！ 卑怯だぞ！ あすいませんもう攻撃はやめてください！」

怒鳴りつけたり懇願したりしながらもちやつかりと足だけは動かしている斎賀。微妙に器用である。

『アオ

ン！』

『ギヤ

！』

死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！ マジ死ぬつて！ 僕死ぬつて！

あの狼野郎そこんとこ分かつてんのかこん畜生！

とにかくあんな大きな声聞いたら逃げるのが俺のポリシー。決してビビッてるんじゃ無いぞ。ビビリじゃないからな……

『グルルルルル』

……

「死ぬうううう！」

唸り声に恐怖して一目散に逃げ出した俺。別に怖くなんか無いぞ。ただ早く寝よゝかなゝつて

『ガウツ！』

ハイスマセンデシタ。H A H A H A 俺にも素直な所があるのでよ。……悪いか！？

既に上着の半分が破れていっているという、普通の人を見たらキチガイに見えなくも無い格好で斎賀は走り続けた。

数分後

『やつてやつたぜコンチクショ――――！』

斎賀は歓喜の雄叫びを上げた。

体から溢れ出た汗で髪やら衣服やらがべたべたにくつついていた。所々に軽く切り裂かれた所があり、薄い赤色に染まっている。

全力疾走で数分も走つたことで体力が限界に近く、荒い息をしながら

ら腕で汗を拭う。

「フハハハハハハハ！」

達成感で気持ち悪い笑いが全く止まらない。

後ろから狼の姿は見えず、俺が狼相手に足で勝つた事がたまらなく嬉しいのだ。

普通なら有り得ない経験だが……

「獣のクセに足が遅いんだよ…」

ここぞとばかりに必死に罵倒を始める。

本来ならば簡単に追いつかれて体を食り食われていたというのをいきな物である

「あー、疲れた」

その場で一気に崩れ落ちる。

幸いにも近くに樹木があつたのでそれに腰を預けて脱力する。

達成感と共に緊張が緩み、今まで溜まっていた疲労が一気に開放される。

その疲れはどことなく気持ちよく、時折拭く爽やかな風が頑張った俺へと褒美に思えた。

久々に運動した為に太股ふとももと脛脛ふくひのきがぱんぱんになってしまったのが少し難点だったが……

「あふう」

鞄から取り出した飲料水を頭の上から落とすと、ひんやりとした水が汗ごと流れ落ちていきさっぱりしてこんな声が漏れた。

少々今の服装は破れたりしているので着替えたくなつたが、もうそんなことをする気力なんどどこにも残つていない。

濡れていて気持ちいいし、もうちょっとこのままでいいか。

そんなことを思つていると、死の恐怖から開放された安堵感と程よい疲労感が重なつたことで、まぶた瞼が重くなつてきた。

こんな状況で寝たら風邪引くぞ、と自分を叱咤したが、睡魔を撃退することまでには至らず、結局俺の意識は吸い込まれる様に消えていった。

数時間後

うん、運が悪いって事は崖から落ちたときから気づいてたよ。気づいてたんだけどさ……

「龍なんて聞いてねえぞおおお！」

俺は再び逃走していた。

何故なら起きた途端双の目が俺を射抜いていたからである。

何がなんだか分からぬまま恐怖心に駆られたことで再度全力疾走。前回と同じように走つていればまたやり過ごせていたならばどれほどいいだろう。

しかし……今回は追いかけている獣の種類が違つた。

そう 龍だった。

見事なまでに全身を漆黒に染めていた黒龍。

しかし俺を捉えるその瞳は魅入られるほどに紅く澄んでいる。

体長は大体3メートルぐらいだろうか。想像していたよりも猛々し

く感じられるのは纏つている雰囲気のせいだろう。

四本足でしつかりと立っているその姿は生物の頂点にも感じられる。一瞬足が竦んで動けなくなりそつた斎賀は現実逃避して戦略的撤退を繰り返していた。

要するにここは夢だと自分に言い聞かせているのだ。

それでも鼓膜が破けそうなほど大きい咆哮が繰り出されると斎賀も絶叫を上げて対抗するのだが、結局は震え上がって必ずといつていいほどにけそうになる……

『グオオオオオ
「ぎや
！』

なんで龍がこんな所にいるんだ！？ 龍は幻想の中の生き物であつて現実にはいられないはずだらうが！ と叫びたくなつたが、本当にそれどころではないのでやめておいた。

先ほどとは比べ物にもならないほどの危険を感じしている頭が、的確に一つの命令を与えてくれた。

逃げろ！
逃げろ！
逃げろ！
逃げろ！

俺！

それは動物ならではの危険信号であつた。

逃げていても対格差が対格差なので直ぐに追いつかれてしまうが小柄ならではの小回りを活かし方向転換を繰り返している。

龍には会つてみたかつた斎賀だつたがやはり命を狙われるのは御免だ。

炎を吐いたり敵を倒したりして格好いいと思うのは幻想の中だけであつて、現実では本当に迷惑極まりない行為としか言いようが無い。しかもその敵にとつては尚更だ。

『ガアアアアア

！』

「やああめええてええええええ！」

必死に懇願するも全くの効果無し。

死に物狂いで逃げてきているのでもう体力的にも余裕は無いが命が危険に晒されていれば人間たぐま遅しいものである。

どうせなら精神的にも火事場の馬鹿力というやつが発動してくれればいいんだけどな……

「しまつた！？」

体力的には火事場の馬鹿力という奴で何とかなっていたが、足のほうが先にダウンして結局もつれて顔面から地面に激突。

慌てて後ろを見るが見ただけでは何の解決にもならなかつた。

既に龍も足を止めて斎賀のほうに牙を向けていたのだから。感じたことも無い生理的恐怖と、黒龍から発せられる霸者の雰囲気に気圧され、恐怖し、斎賀はもうそこから動き出すことが出来なかつた。

「！ そうだ！」

最後の望みを賭けて斎賀は鞄の中を漁くり回し、ところかまわず食料をばら撒いた。

「……」

紅い瞳が斎賀を捉え漆黒の瞳が黒龍を捉える。

そこで暫しの沈黙が発生した。

一秒一秒がこれまでに無いほど長く、そして重く感じられる。

そして

「 もひ…… 駄目…… 」

心身ともに限界に達した斎賀の視界は黒で塗りつぶされていくのであつた。

第一話 行徳う者（後書き）

ファリシアと邂逅するのは次の次ぐらいを予定しています。

第一話 初邂逅

「ふあ～あ っくしゅん」

欠伸を一つしていたら、それに混じってくしゃみをしてしまった。慌てて鼻を啜^{すす}り、今体に纏つているずぶ濡れの服をだるそうな半眼で確認する。

「ん？ なんで俺こんなとこにいるで、こんな服着てんだ？」

その問には覚醒してきた頭が記憶を引っ張り出してきてくれて答えてくれる。

「確か狼に追つかれて……その後……」

龍に……といつ言葉が出る前に、斎賀は喋るのを止めていた。記憶が鮮明になるにつれて、あのときの恐怖が再び襲ってきたのだ。あの牙が、あの爪が、あの顎が、体をもし貫いていたらと想像すると、おぞましいことこの上ない。

一つ間違えば普通に殺されていたという、最大の恐怖。まさしく九死に一生を得たという事実。

「……くそつ」

服を一瞬で切り裂かれた場面や、後一步で龍の牙に捕らえられたという場面。

色々な場面が織り交ぜられて悪戯に斎賀の恐怖心を煽^{あお}つてくれる。それに寒さも加わって、体が小刻みながらもがくがくと震えだす。それを抑えようと必死になつて両手で肩を抱くが、一向に止まる気

配を見せてはくれなかつた。

時間がたつにつれて恐怖心は募り、それは感じたことの無い怯えへと変換されていく。

こんなみつともない姿をしたのは何年ぶりだらうか。多分餓鬼の頃以来だらう。

「……くそがつ」

弱弱しく誰でもない自分を罵る。

だがそれでも震えることは、怯える事は、心から消えることは無い。常に敵が背後にいるような感じがして、それからいつ命を奪われるかもしれないという焦燥に駆られてせわしなく頭が動く。

「大丈夫だ。敵はいない。大丈夫だ。敵はいない。大丈夫だ。敵はいない。大丈夫だ。敵はいない。大丈夫だ。敵はいない」

繰り返し同じ事を呟くことによつてその言葉が支えになつてくれるような錯覚が起つた。

「 つくしゅん」

体の竦みが取れていくと一度目のくしゃみが出た。

風邪を引いてしまつたかなと思い、いそいそと鞄に詰め込まれていた服に着替え始める。

月明かりに照らされながら、真新しい灰色の服が体に温かみを取り戻してくれる。

「それでここは一体どこだらう? 龍いたし絶対日本じゃないよな……。いやいや、多分俺の知つてる外国でもないし……下手すりや地球ですら無いし。RPGの世界に入り込んだら」とかいう事は

ない……はず。だつてRPGって言えば先ずは雑魚敵から順番に倒していくって、レベルが上がつたら最後にボス戦が基本だろ。それを初回からボス級のドラゴン相手とかはつきりいって不可能に近いし。そんな高難易度のRPG作つている会社なんて絶対無いからな。つてことは……まさか異世界！？

消去法で想定しつる結果が一つに絞られた所で、斎賀はテントを組み立て始めた。

組み立てるといつても少し手を加えれば簡単に出来る式の物だが……。

「でもなあ……異世界に行つた小説見てきたけどろくなものがなかつたんだよな～」

そう。当たり前のことだが小説に出てくる主人公は絶対に平穏な生活を送ることは許されない。

ここは小説の中じゃないのだから別にそんなことを思つ必要は全く無い。無いのだけれど……。

「絶対巻き込まれそうだ……」

明日からどたばた騒ぎが起つるかもしけないという可能性を否定しきれない斎賀は一人肩を落とした。

基本的に面白いことは続くがそれ以外は飽きっぽい性格なので、これからおこるであろう出来事に危惧しているのだ。

勿論、一度は来てみたいと思つていたこの世界に来れて心を躍らせてはいるのだが……。

「素直に喜べないのは、命の危機に瀕したからか？」

一人のときに疑問をすぐ口に出してしまつのは、小さいときからの癖になってしまつていて、これといって迷惑をかけていないので気にしてはいなが。

「ま、カメラ持つてきてなかつたのが悔しいけど、これから龍とか架空の存在だつたモンスターがどんどん出てくるからなあ。うつ、楽しみだ！」

さつきの恐怖なんてもう忘れた。

実を言うと少しばかりけど、そんな物関係ねえ。

俺は、今から、誰も田に出来なかつた世界を堪能するんだ！

布団の中に入るとそんな風に思えてきて、急に溢れ出てきた興奮が眠気を吹き飛ばす。

今すぐにでも動き回りたかつたが好奇心を抑えてやめておいた。

斎藤斎賀、十八歳。馬鹿な高校生であつた。

翌朝、寝惚けながら散歩していた俺に、ある出来事が襲つた。その出来事は、唐突に、それでも確かに起こつた。ただ普通に暮らしていきたいだけなのに。そんな願いを簡単に踏みにじる出来事だつた。

平穀を、強制的に強奪されるという悪夢。

これから物事が俺を中心に動いていくといつ恐怖。

それが起こった瞬間、俺は寒氣すら感じた。

自然と靴が擦れながら後ろへと向かっていき、息を必死に押し殺していつでも逃げれる準備を整える。

それほどまでに危険がそこには溢れていた。

何故なら……何故ならつ！

「…………？」

今、俺の視線の先には、なんと、同じ年位の少女が、佇んでいたからだつ！！

不味い。非常に不味いことになった。

美少女邂逅 知り合つたことで巻き込まれる。
この方程式はもう既に予測済みなのだよ。
だけど…………このまま去るのもなあ。

横目でちらりと少女を盗み見る。

ちゃんと視線が重なつているはずなのにどこか遠くを見ているような紅く艶やかな瞳。

その瞳の色と同じくして、煌きを放つてゐるさらさらな真紅の絹髪。この際だからはつきり言おう、うん、滅茶苦茶可愛い。

外人……もとい異国の地の人だからなのだろうか。露出度がかなり高い。服なんて^{へそ}臍が見えるくらいだ。

スカートはミニスカートっぽいやつで、黒の二一ハイソックスを履いている……しかし、変な感じが少しだけしてしまつ。

「あの～、一人？」

とりあえずなんか話をしなければと思い、恐る恐る、といった感じで声を掛けてみると

「……………ん」

僅かな間を空けて、少女は「クリと首を一つ振つて肯定された。」
「ぢやら異國の地とはいえ言語は通じるようにしてくれている」
「い。流石といえば流石だな、神様。」

「迷つた？」

「……………違つ」

今度はかなりの間を空けて否定された。

瞳を見れば嘘か誠かが判断できるだなんて事を聞いたことがあるけど、少女の視界には斎賀を除けているような感じがする。

「こうより興味の対象にすらなつてないんじやないか？」

「こんな所にいたら危険だぞ？ なんなら俺と一緒に出口探すか？」

「一人よりも一人のほうが危険も減るだろ？」

まあ危険分子の可能性が高いが、こんなか弱い少女を独りにするほど俺も薄情じやない。

「……………危険じやない」

だがその提案と危惧は首を振りながら否定された。

「……………皆……………いる」

「皆？」

オウム返しに聞いてみると、少女は首肯した。

寡黙な性格らしく、少し言葉を話すか、首を縦に振るか横に振るか

だけで会話を成立させていく。

「親御さん?」

そう尋ねると、次は首を横に振った。そういや一人つて言つてたな。

「誰?」

「…………エアリスト達」

「エアリストって?」

「…………仲間」

傍から見れば会話になつてているのかいないのか。

意思を通じ合わせられないことは無いので、もう少し突っ込んでみる。

「エアリストって、人の名前?」

その問いに少女は再度首を振ることによつて答えた。

人じゃなれば大方犬か猫だろ?」

大まかに予測しながら話を本題に戻していく。

「君はここで何をしてたんだ?」

「…………?」

意味が分からないとばかりに首を傾げられる。

「見たところきこりとかには見えないし……斧も持つて無さそうだしね。迷つてもいなつて言つてたし、何をしていたのかなつて、ちょっと気になつてわ」

「…………君じゃない」

一頃りの時間を置いた後、少女はボソリと呟いた。

「レイ」

それが名前の事を言つてると理解できるには少々の時間を要した。
手短で簡潔な……悪く言えば無愛想な自己紹介だ。
しかしレイか……漢字で書くと『零』かな？ それとも『怜』か？
それとも仄仮名の『レイ』か？ まあレイでいいや。

「俺は斎賀。斎藤斎賀っていうんだ。よろしくな

微笑を浮かべて右手をレイに差し出す。

「…………？」

斎賀が手を差し出した意図を掴めないのが、レイは不思議そうな顔をしてこちらを見てくれる。

いや、やはり俺の先を、と言つたほうがいいだろか。少し虚しい。それにもこの顔つてことはここで握手は漫透していいんだろうか。まあ俺の常識がこここの常識じゃないわけだし、別にそこまで驚くことじやないか。

慌てて手を引つめると、再びレイに尋ねた。

「レイはなにで何をしていたんだ？」

「…………散歩」

「散歩つて……ここ森の中だぞ？ 色々獰猛な野獣も襲つてくるし……この森に龍がいるって知つてる？」

返事は首を縦に振ることで済ませた。どうやら知つてこないらしい。

「あなたもここに住んでるの？」

「へ？」

「あなたもこの森に住んでるの？」

真剣に答えるつもりで瞳が語りついているような感じがした。

そう判断した理由はレイの瞳がきつちつと、斎藤斎賀、自身を捉えていたからだ。

だがどんなに考へてもなんて答えばいいのかが分からぬ。
ここに来て三日田といふことには一応なるのだが、そんなことで住んでいふといふことになるのだろうか。

うーん、異世界から飛ばされてきたなんていふたら、変な人、のレツテル貼られるの間違いないだろ？

ならとりあえずここは無難に、

「この森入つたら、いつのまにか迷つてたんだよ。全く、困つたもんだよな～」

「…………？」

首を傾げるレイ。なんだ、そんなにおかしなことか？

「…………家……来る？」

「家つて……この森の中にあるのか？」

「…………ん」

次は首を縦に振る。まるで子供みたいだな。

「俺男だけど一緒に行つていいのか？ もう一度言つが俺男だぞ？」

「…………？」

「一つ屋根の下で若い男女が一人きりなんてのは色々不味いことがあるんじゃないのか？まあ俺はそんなことはしないけどさ」「…………問題ない」

今の会話から分かつた結果。

どうやらこの世界は日本みたいに男女の恥じらいというかなんとうか、そういうものが無いらしい。

異世界だからということで非常識には目を瞑つていたのだが、やはりというべきか、異世界は凄かった。

日本で育ってきた俺は、男として見られていないうちで少し落ち込んだのだが。

「じゃあ、お願ひするよ」

ここに何時までも居たいというわけではないが、我武者羅に一人出口を探しても見つかる可能性は低いので、一応といった感じだ。それにここで初めて会った人間。何かしらの縁がこれから先ずっと続くなれば、もうどうにでもなれという気持ちで承諾した。

「…………」

しかしレイからの返答は無く、あるひことかそのまま踵を返して歩き出してしまった。

これは一体どういうことなんだろうか？…………異世界人の気持ちなんて知るか！？ 考えても分からんなどし本人に聞いてみるか。

とこうわけで、早速俺はレイを呼ぶことにした。

「レイ～」

「…………」

返事は無い。

「レイ～」

「…………」

一応離しかけられたがらこの距離を取つたままつこに行つてゐるのだが、相変わらずレイからの返答は来ない。

「レイ～」

「…………」

声は……届いているはずだ。

なのに振り向いてくれないって事は無視をされてるって解釈してもいいんだろうつか？

荒れ放題の森の中で斎賀が枝や土やらに足を取られていつているのに対し、レイはそれが当然とばかりにすいすいと進んでいく。あちこちに虫が飛び交い、ついでに俺に突進してくる。‘つかこと’この上ない。

「レイ」

「…………？」

斎賀は思わずレイの肩を掴んでいた。

周りに気を配りながらレイのスピードに合わせるのが難しくなつてきたからだ。

何事？ とばかりにレイは半身だけ振り返る。しかしあはつその瞳の焦点は斎賀を捉えてはいない。

「俺もつこひきで良かつたのか?」

「……?」

意味が通じていないのでどうか? いや、そんなはずは無い。一応単語だけならレイにも通じるし。

「俺はレイにつこひきでも良かつたのか?」

真剣にそう尋ねると、レイはいつものように首を傾げた。

「? ……さつきから、そう言つてゐる」

「あ、そうか。そうだったな、悪い」

そもそも当然のよう言いつたレイが正しい気がしてくる。まあ正しいのかもな。一瞬見捨てられたかと思つたけど……。

しかしその後もうこれで話は終わりだと言わんばかりにレイは前を向き、再び歩き出した。それに続いて俺も……つてこれじゃさつと一緒じゃん!…

「レイ、歩くのに正式とかあるのか? どんなに頑張ってもレイにあわせられないんだけど」

「? ……足を、動かす」

「そうじゃなくて。どうこう風にしたらこの森の中をすこすこと歩けるのかな~って」

「……普通に歩く」

駄目だこいつや。やつ思いながらもレイの後を必死に追いかけていく。やつくりと自分のペースで歩いていたときとは格段に難易度が高レベルなものになっていた。

時にいきなり現れる枝が顔に直撃し、時に足元がお留守になつてずつこけ、時に窮屈な木々の間を抜けているときに体の骨が悲鳴を上げる。それに対しやはりというべきか、レイは涼しげにひょいひょいと障害物を苦も無く避けていつていた。真似してみようかと思つたら逆に歩きづらくなつたので、自然体に戻す。

「……」

「……」

レイは基本的に必要のあること以外は口を閉ざしている性格のようだ。これがこの世界の常識なのか、はたまたレイだけの個性なのかは未だ分からない。

寡黙つていうのもそれはそれでいいとは思うが、流石に一人きりでの沈黙には若干辛い。

それでも、レイの顔を見てみたらほんの少しだけど、嬉しそうに見えたのでそのままいいかといつ結論になつた。勘違いの可能性も否定は出来ないが……。

「……ん」

不意にレイが振り返つてきたので慌てて立ち止まる。

「どうしたんだ？」

「……あれ」

レイが指差した方向をつられてみると、そこには

「エアリス」

昨日斎賀を追いかけていた黒龍が、とても気持ち良さそうに眠つて

いた。眠っていると判断していたのは紅い瞳が見えないからであり、気持ち良さそうと思つたのはなんとなくそんな雰囲気を出して いたからである。

普通ならば絶叫して逃走していた斎賀だが、あまりにも隣に立つて いるレイが普通の表情をして いたので今のところは腹の底から湧き上がるような恐怖を感じることは無い。

「エアリス？」

「エアリス」

もしかしたら間違いかもと聞きなおしてみたのだが、やはり指差している方向には黒龍がいる。

「まあ いつか、別にここは地球じゃないんだし。地球の常識持ち込んだらそれはそれでおかしいことになるし。これくらいで驚いてたらまだまだとかいう展開が次から次に起につきそうだし」

レイに聞かれないような小さな声で呟いた。頭が柔軟、もしくはただ現実逃避しているだけだったが、取り乱さなかつたのは幸いだろう。

「……挨拶……する？」

「遠慮しない」

気持ちのいいほどの即答。

レイはどうだか知らないが、命を賭けてまでする挨拶なんてお断りである。

「……」

じつと、何かを期待しているみたいな目で「ひがを見つめて」の「ひが」がいるのは氣のせいか？

「…………」

「氣のせい氣のせい。知らん振り知らん振り。」

「…………」

「や、そんな目をしたからって挨拶なんかしないぞ！ 断固として拒否する！」

「…………」

「うう、そんな反則的な上田遣いはやめてくれ。」

「…………」

「分かつた！ 分かつたから！ ちやんと挨拶するから！ するからそんな目で俺を見ないで！ 本当にお願ひだから！ そんな潤んだ瞳で俺を見ないでくれ……」

こつなつてしまつたのは仕方が無いと思つ。涙田 + 上田遣いに逆らえる男は稀なのだ。

ま、触れるだけなら問題ないだろ。

腹をくくつた斎賀は、一步、また一步と着実に黒龍に近づいていく。そしてあと少しで触れられる、といった所でいきなり

『ガア』
『ツー』
「…………」

黒龍が欠伸をするように口を大きく開けたのに怖気づき、斎賀は腰を抜かす。

立ち上がりようと必死に試行錯誤してみるが、立てない。

「うう……あつー。」

いぐり異世界は異世界だと割り切れても怖いものは怖い。結局、斎賀は黒龍に脅されながら必死に氣を失わないようにするのが精一杯だった。

「…………？」

必死になっている斎賀を、後ろで不可解そうにして眺めているのが約一名。

結局、数分後にレイが手を貸してくれるまで、斎賀は座り込んでいたのだった。

第一話 初邂逅（後書き）

：前言撤回。指摘を受けた通り中々話が進まないのでファリシア邂逅までは時間が掛かりそうですね。orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9124f/>

異界から召還された真水の騎士

2010年10月13日18時29分発行